

<編集部にて>の訳

- W: こんにちは、マイアー君！
- M: こんにちは、ヴェルナー編集長！ ぼくに仕事ですか？
- W: ええ、あなたを日の出づる国へ派遣したいの。
- M: 日本ですか？
- W: 東と云ってもそんなに遠くではなくて、新地邦州、つまり旧東ドイツ(ドイツ民主共和国)よ。あそこについては詳しいかしら？
- M: そんなには。
- W: まあそれだったら、あなたにとっけてきつと興味深い旅行になるわね。願わくは、読者のみなさんにとっけても興味深いルポルタージュになるといいんだけど。まずはザクセンに行って、州都ドレーズデンを見てきてちょうだい。
- W: 帰ってきたわね。で、ドレーズデンはどうだった？ さあ、話してちょうだい！
- M: そうですね、まだ洪水の傷跡が多少見られます。たくさんさんの建物や住居、店舗が水没になりましたから。
- W: 家やお店が損傷を受けていたら空気がそんなによくない、というののはわかるわ。2002年にエルベ川の洪水がすべてを壊してしまっただけで、2006年にまた川が氾濫したときも、最終的には骨の折れる再建作業の末にドレーズデンはすっかり元気になるだけ。洪水のことはいつも考えとおかなきゃならないのよね…。それでもいくらか町の文化財を見ることはできたんですよ？
- M: ええ、もちろん。たとえばツヴィンガー宮殿、あそこにはたくさん有名な絵画やその他の芸術作品が展示されています。それから最近落成したばかりの聖母教会、これほとりわけ印象的でした。
- W: ええ、18世紀の古い設計図に基づいて、元どおりに再建されたのよね。それともっぱら献金だけで！
- M: 驚くべきことです。教会の廃墟を、今後も戦争の恐ろしさを警告する記念碑としてそのまま残しておくかどうか、長い間議論があったのですが…。
- W: ゼンパー歌劇場はどう？ 今はシーズンかしら？
- M: ええ、上演しています。
- W: で、オペラはどうだったの？

M: ヴェルナー編集長、そこには行かなかったんです。ぼくオペラは好きじゃないから。すべてが大げさすぎるし。それに自分自身のことをとても重要な人物だと思いたい、有名なデザイナーのドレスを着て、幕間にはシャンパンをちびちびすすっているような人たちがあまりにも多いから…。そういうことが気に障るんです。

W: あら、また始まったわね…。

<雑誌記事>の訳

ドレーズデン

ザクセン州の州都ドレーズデンは、人口49万、第二次世界大戦の終わりには、ほとんど完全に破壊されましたが、徐々に、歴史的な町の姿の主要な部分が再建されました。その廃墟がほぼ60年にわたり、戦争の恐ろしさを警告する記念碑として残されていた聖母教会も、町が誕生して800周年にあたる2006年に間に合うよう献金によって再び修復され、2005年10月30日には壮麗なセレモニーとともに、その落成が祝われました。

バロック建築だけでなく、音楽の伝統によっても知られるドレーズデンは、観光客の人気の的になっており、毎年世界中から約700万人もの訪問者を惹きつけています。すでに1985年には、ザクセン国立歌劇場が再開しました。この歌劇場は、1870年から1878年にかけてゴットフリート・ゼンパーがイタリア・ルネサンス様式で建てたものです。さらにこの町の目印となっているのは、レジデンツ城とツヴィンガー宮殿です。しかしまたここ数年、大学町ドレーズデンは、ヨーロッパのハイテク拠点へと発展してきました。未来技術および先端技術関連の多くの会社が、このザクセンの州都に居を定め、ここで研究し、生産し、そして取引を行っているのです。

2002年8月——そして、いくらか規模は小さいものの2006年4月にもう一度——ドレーズデンは大変な洪水の大災害に見舞われました。その際、多くの文化遺産、会社の建物、公共施設、そして住宅が破壊されたり、損傷を受けたりしました。

(トーマス・マイアー)